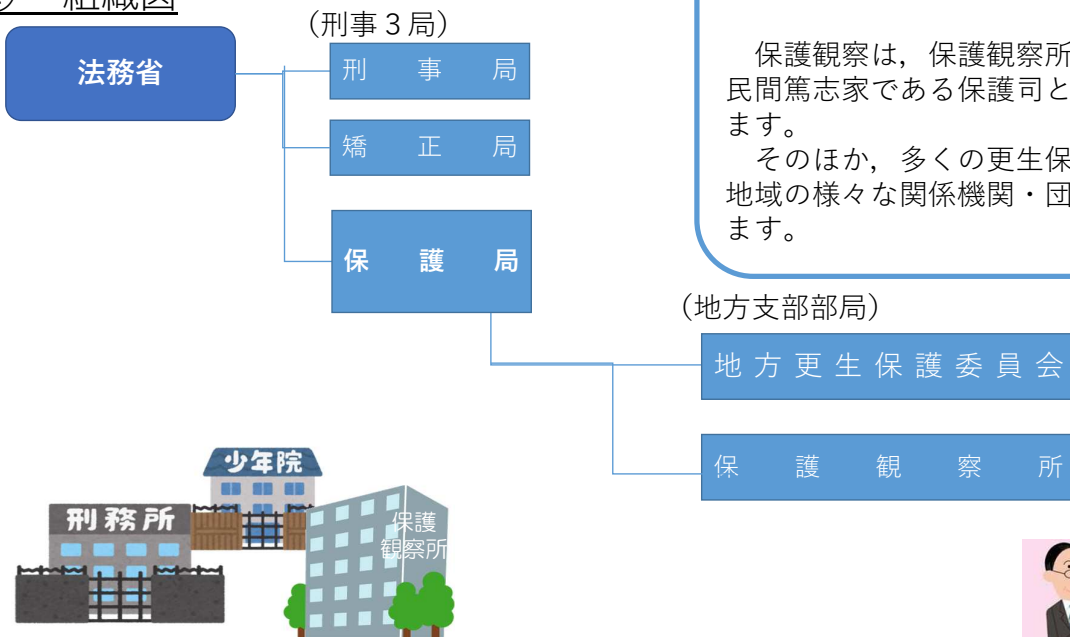


刑余者支援の現状と居住支援の必要性

法務省 保護局 更生保護振興課
地域連携・社会復帰支援室長 田中大輔

1 なぜ、刑余者に居住「支援」なのか

① 組織図



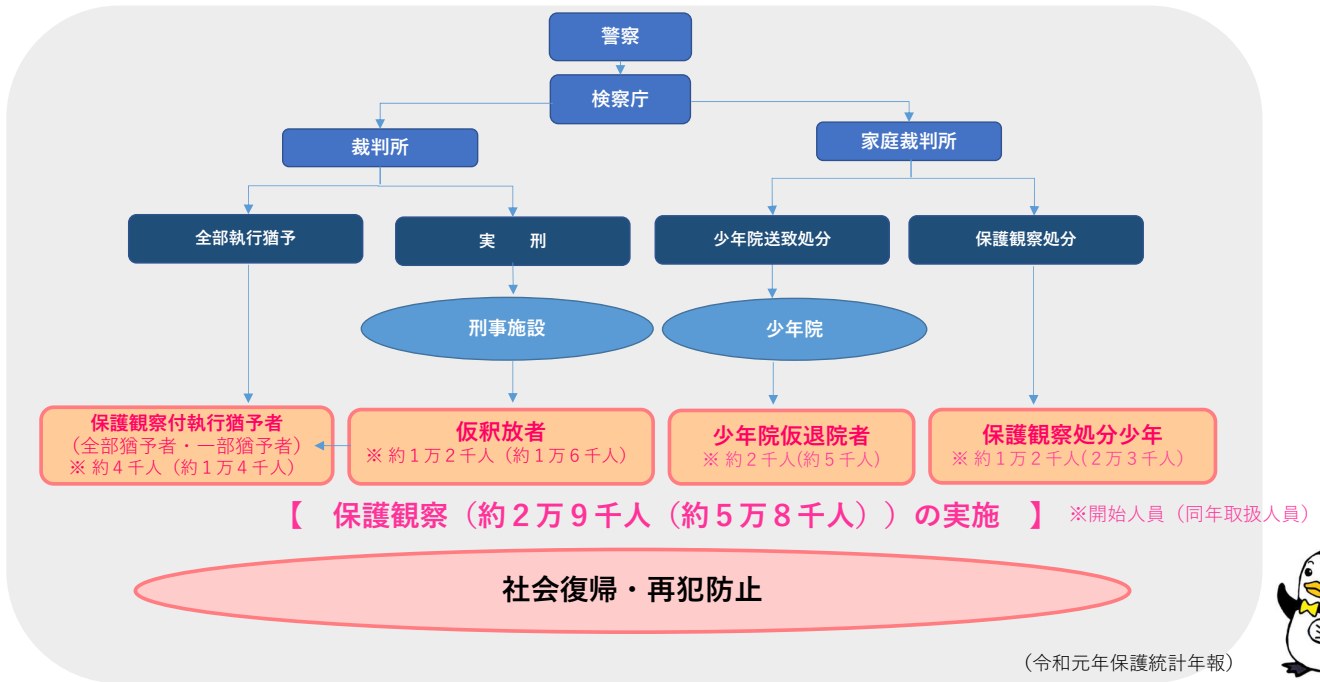
更生保護を支える人々



保護観察は、保護観察所の職員である保護観察官と民間篤志家である保護司との協働により進められています。
そのほか、多くの更生保護ボランティア団体のほか、地域の様々な関係機関・団体に関わっていただいています。

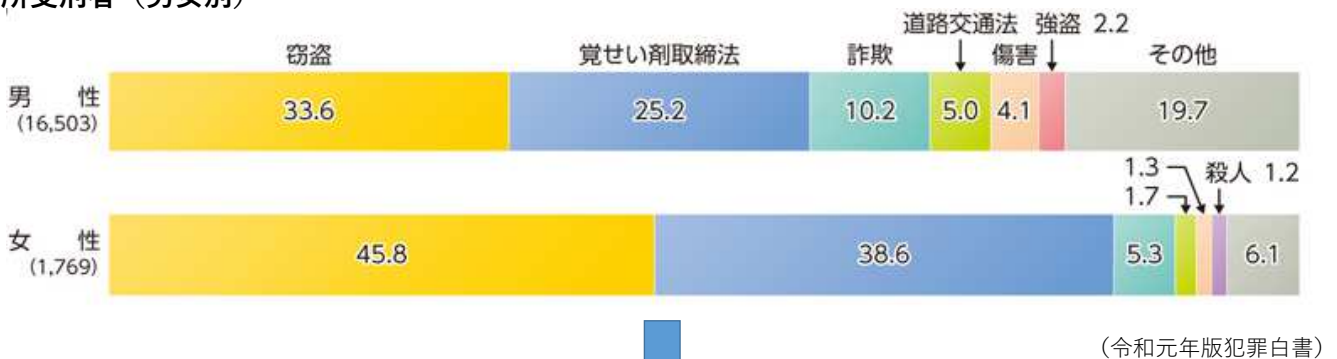


② 刑事司法の流れ



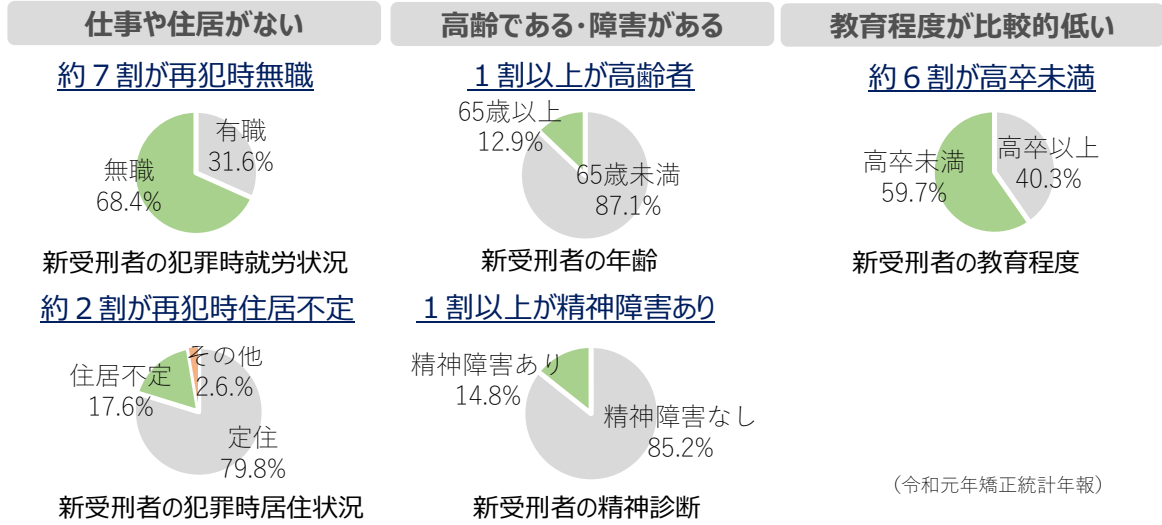
③ 受刑者の罪名別構成比

入所受刑者（男女別）



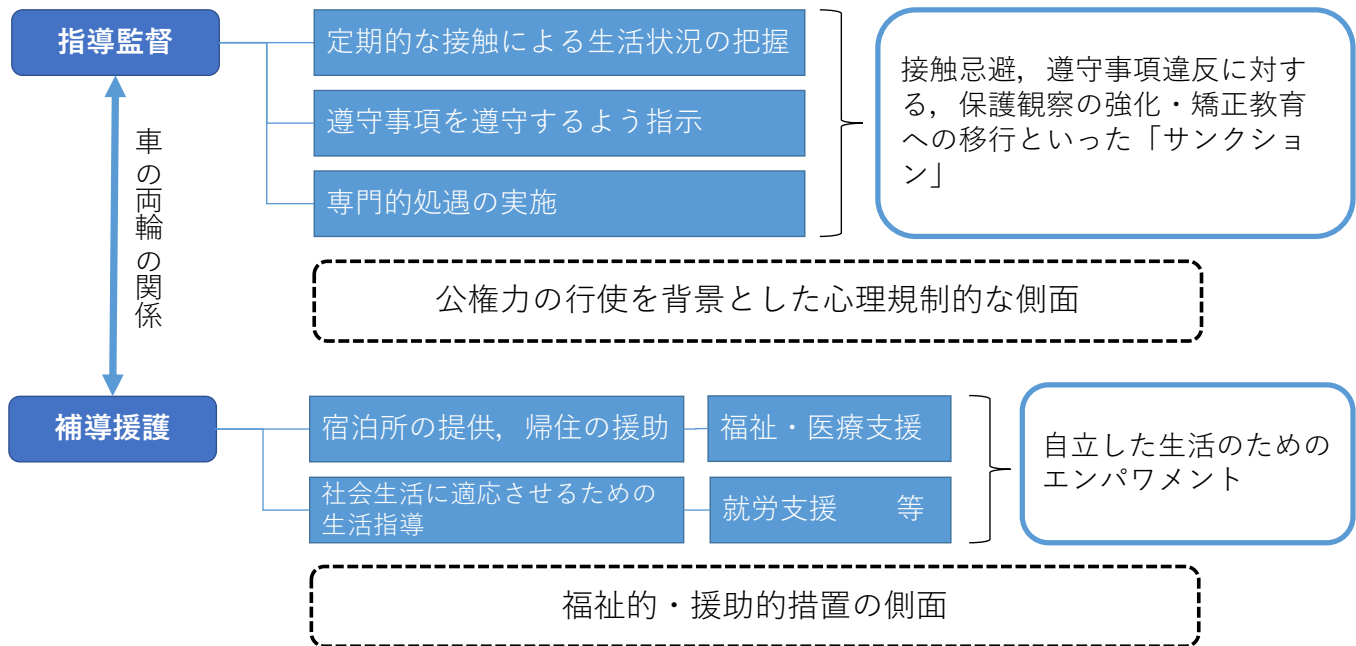
窃盗, 覚せい剤が多数を占めている

④ 刑余者の生き辛さ



再犯防止のためには、出所者等の生活支援をすることが早道

⑤ 保護観察の概要



⑥ 保護観察における主な支援対策（居住支援を除く。）

就労支援対策

【刑務所出所者等総合的就労支援対策】（H18～）

- ・法務省と厚生労働省の連携事業
- ・ハローワークにおける専用窓口設置，出所者専用の就労支援メニュー，矯正教育の充実，身元保証制度

【更生保護就労支援事業】（22都道府県）

- ・民間の専門団体に委託して，マンツーマンによるマッチング支援等を実施（H23～）
- ・民間の専門団体に委託して，出所者及び雇用主の双方へ職場定着支援等を実施（R2～）

【刑務所出所者等就労奨励金】

- ・雇用期間に応じて協力雇用主に対して1人当たり年間最大72万円を支給（H27～）

【コレワーク】（全国8か所）

- ・企業と受刑者の出所前マッチングの支援（H28～）

福祉支援対策

【地域生活定着支援センター】（H21～）

- ・行き場のない障害者・高齢者である受刑者等の，出所後の福祉サービス確保等の支援

⑦ 保護観察における居住支援対策（1）

更生保護施設

- ・明治時代の篤志家によって始められた事業を源流とし，現在，全国で103施設が運営（大半が20名定員）
- ・行き場のない刑務所出所者等を，自立資金を蓄えるまでの数か月間を収容保護し，原則24時間体制
- ・法務省の認可施設で，委託費を支給
- ・仮釈放制度に不可欠な施設



自立準備ホーム

- ・平成23年度から「緊急的住居確保・自立支援対策」として開始
- ・NPO法人等が管理する施設の空きベッド等を活用するもので，専用のベッド等を用意する必要なし
- ・全国で703か所（432事業者）が登録（R2.4.1現在）
- ・宿泊場所，食事の提供と共に，毎日の生活指導等（巡回による支援でも可）を委託
- ・保護の期間は更生保護施設に準じ，委託終了後に賃貸契約を締結する例もあり

ただし・・・

いずれも
「一時的」居住支援

⑧ 保護観察における居住支援対策（2）

生活環境調整の強化

- ・ 出所後の居住予定地は原則として、まずは受刑者が指定
- ・ これを受けて、保護観察所において、同予定地において社会復帰を円滑にできるよう、その環境を調査・調整
- ・ ただし、調整困難な場合は、調整を終了し、受刑者に別の予定地の設定を促す。



さらに、H28施行の更生保護法の一部改正により・・・

- ・ 地方更生保護委員会が、必要に応じて、未調整の住居等の調整を行うよう、また、調整中の住居の調整事項について、保護観察所に対して指導・助言を実施
- ・ 複数の保護観察所が平行して生活環境調整を行っている場合、地方更生保護委員会がコントロールタワーとなって広域的な連絡調整を実施

ただし・・・

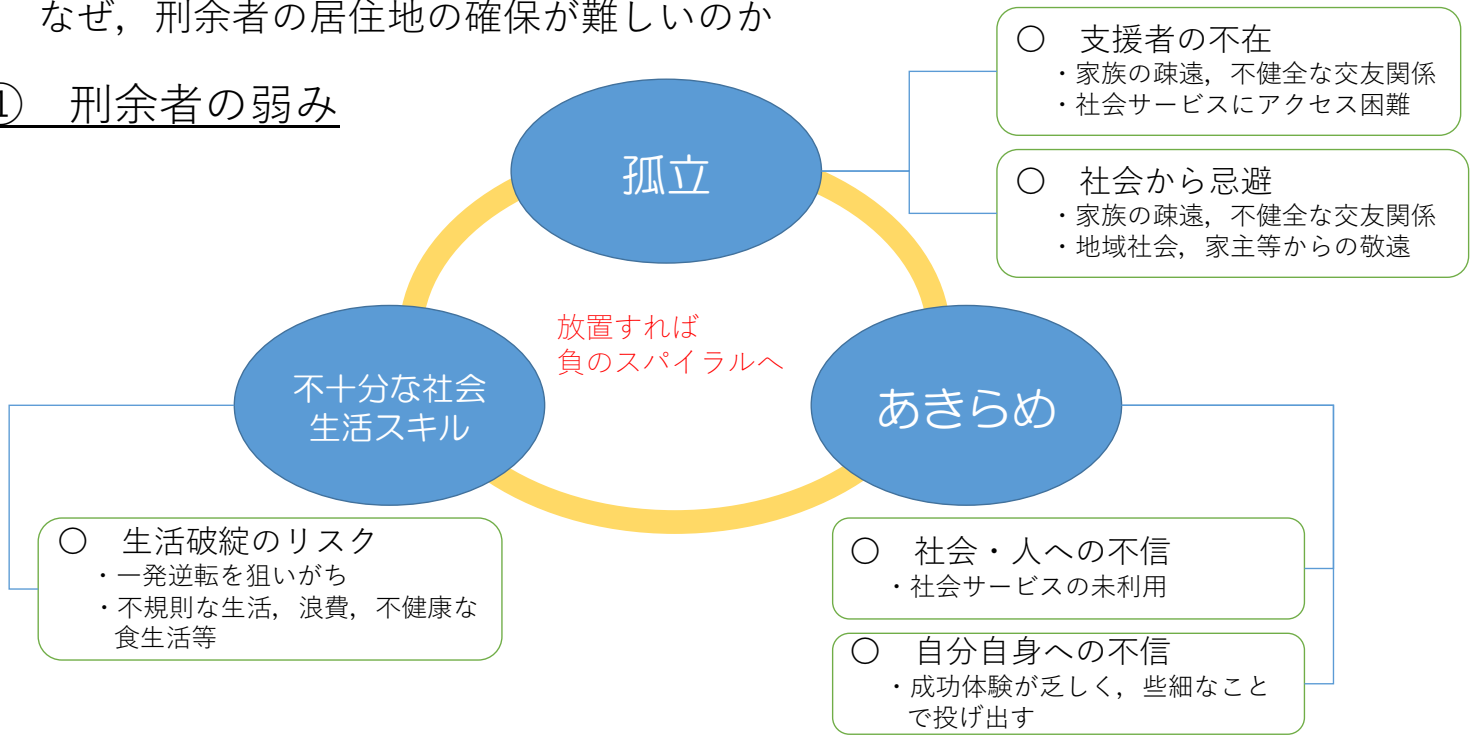
それでも、適切な帰住地が確保できない相当数の出所者が

⑨ 刑余者に対する居住支援の必要性

- 刑務所に入所してきた者で犯行時住居不定であるものの割合(R1) **17.6%**
⇒ 累入者については21.3%， 初入者については12.4%
- 特定の居住地が確保されずに出所した満期釈放者(R1) **3,381人**
- 仮釈放の申出がなされない理由が「住居調整不良」の者の割合 **44.0%**
⇒ 行状不良:25.0%， 暴力団離脱意思なし:7.2%（H25調査）
- 「更生保護施設施設入所者の自立先の確保で困ったことがある」と回答した同施設職員の割合（H30調査） **76.7%**
⇒ うち、困った理由が「保証人が確保できない」：**93.7%**
⇒ 更生保護施設入所者の退所先 「借家」:32.2%， 「就業先」:18.0%

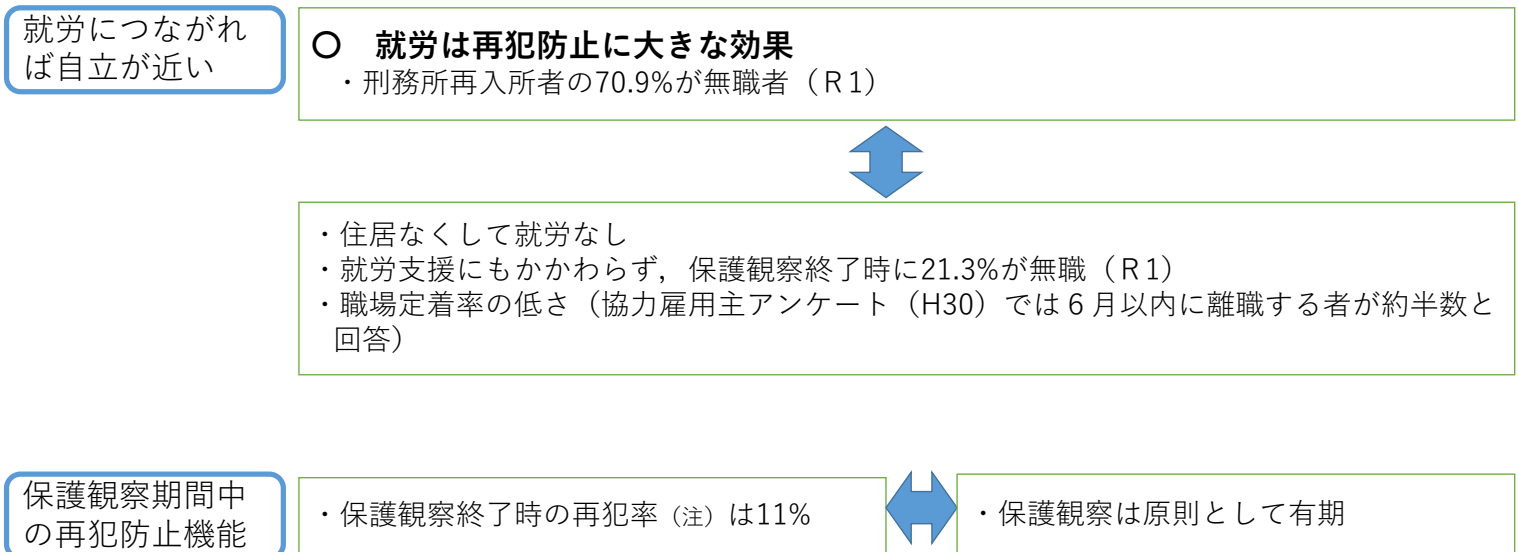
2 なぜ、刑余者の居住地の確保が難しいのか

① 刑余者の弱み



2 なぜ、刑余者の居住地の確保が難しいのか

② 刑余者の強み



(注) ここでいう「再犯」とは取消し (保護処分, 仮釈放, 執行猶予), (少年院への) 戻し収容, 身柄拘束のまま保護観察が終了した場合を指す。

3 刑余者の居住支援の課題と展望

① 刑余者の処遇の大前提

刑余者が犯罪に陥らず、安定した生活を継続するためには、

- 職場定着
又は
○ 福祉支援

が不可欠・・・

その基盤こそが居住地の確保

② 課題と対応の方向性

【課題】

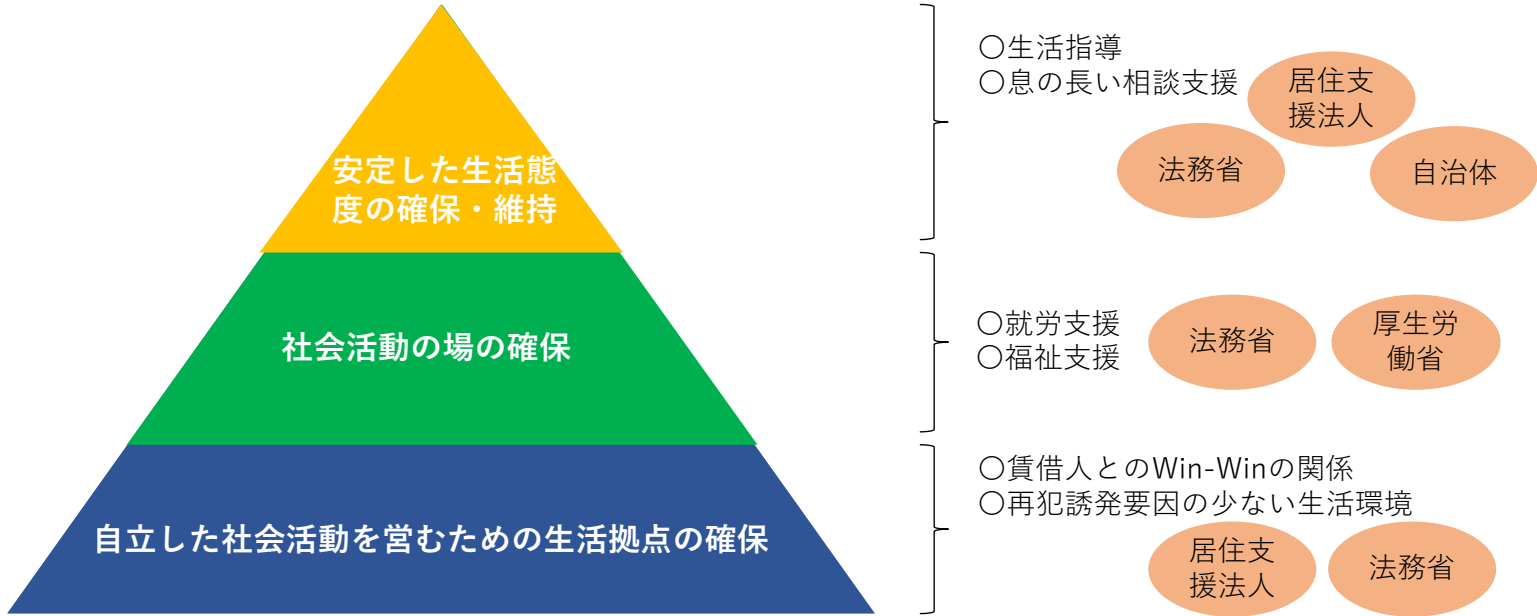
- 居住地が定まらなければ、保護観察が実施できないこと。
- 更生保護施設等の受入れに限界があること（地域関係、職員体制等）。
- 出所者のイメージ連帯保証人不在等により、家主・不動産会社に忌避されがちであること。
- 生活リズム、食生活、金銭管理等の指導がなされないと生活破綻に陥りがちであること。

【対応の方向性】

- 生活環境の調整を徹底し、可能な限り保護観察・更生緊急保護に結び付ける。
- 更生保護施設等の体力アップ、退所後の住居調整能力の向上。
- 出所者にも利用可能な物件・家賃債務保証の確保。
- 相当期間のマンツーマンによる見守り、生活指導。

③ 今後の展望（1）

犯罪をする必要のない自立した生活の大前提は、適切な居住の確保
＝決め手は「居住支援法人とのコラボ」



④ 今後の展望（2）

【当面の検討事項】

- 連携可能な居住支援法人の拡大：事例の積み重ね，居住支援協議会との関係確立
- 支援スキルの普及：これまでの好事例，更生保護のノウハウの共有
- 連携体制の確立：保護観察所及び居住支援法人等の情報共有・役割分担等の整理
- 生活環境調整・更生保護施設・就労支援等の強化：国の責務

御清聴ありがとうございました。

